発行
くまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築住宅局建築課内）
〒862-8570 熊本市中央区水前寺6-18-1
TEL096-333-2537　FAX096-384-9820
e-mail kenchiku@pref.kumamoto.lg.jp

発 行 者：熊本県
所　　属：建築課
発行年度：平成26年度

KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS

vol.40
2015.03

●くまもとアートポリス2014
アジア国際シンポジウム

●くまもとアートポリス推進賞
20回記念シンポジウム

●進行プロジェクト 高野病院

くまもとアートポリス2014　アジア国際シンポジウム

11月29日、30日
於：県庁地下大会議室

KUMAMOTO ARTPOLIS 2014 International Symposium in Asia

くまもとアートポリス（KAP）の取組みをアジア諸国にも広く発信するとともに、県内で建築を学ぶ学生とアジア諸国の学生の交流を深めることを目的としてシンポジウムを開催した。

1日目は、国際学生設計コンペティションの公開審査とパネルディスカッションをひらき、会場が熱気に包まれる中、国境を越えて、地域に求められる建築のあり方や地域の活性化に役立つ建築とは何か議論が交わされた。国内外の学生によるKAP初の試みには、多くの学生から様々な提案が寄せられ、実りある議論は、交流会で最高潮に達した。2日目は、主にシンポジウム参加者を対象として、県南に位置するKAP参加プロジェクトを見学するバスツアーを開催した。

ガジャ・マダ大学のプレゼンテーション風景

国際学生設計コンペティション

阿蘇市にある医療法人社団坂梨会が運営する介護老人福祉施設の中庭に増設される施設を課題とし、創作した作品を持ち寄った国内外の学生たちが海外・国内のそれぞれの部門で競い合った。

課題　阿蘇に建つ「みんなの家」を付設する温泉リハビリテーション施設

審査員　伊東 豊雄（委員長）、桂　英昭、末廣 香織、曽我部 昌史

海外部門では、チュラーロンコーン大学（タイ）、ガジャ・マダ大学（インドネシア）、国立交通大学（台湾）、同済大学（中国）、延世大学（韓国）の5大学の学生が、各国の特色がよく表れ、かつ、阿蘇の地域性にも配慮された作品を持ち寄り、英語でプレゼンテーションを行った。

国内部門には、県内を中心とする九州内の大学や高専の学生から28作品もの力作が集まり、朝早くから、分刻みのスケジュールの中、午後からの公開審査に勝ち進むべく自分たちの作品を精いっぱいアピールした。午後からの公開審査へと進む5作品が選ばれ、来場者が見守る中、改めてプレゼンテーションや全体質疑に挑んだ。

両部門の全体質疑では、ユニバーサルデザインへの配慮や設計に携わることになった場合の意気込みといった審査員からの質疑に対して、自分たちの考えや想いを熱く語っていた。

最優秀賞 海外部門　IN-BETWEEN HOUSE/あいだのいえ

延世大学（韓国）

講評

延世大学：比較的単純なプランに整然と機能がおさまっており、周辺との関係におけるヴォリューム設定（形状）に説得力がある。

九州大学D：水害対策も考慮しての丘の提案とルーズな関係性の存在は妙な説得力がある。"大らかで楽しそう"という点では阿蘇の風土にふさわしい。

最優秀賞 国内部門　丘に集う

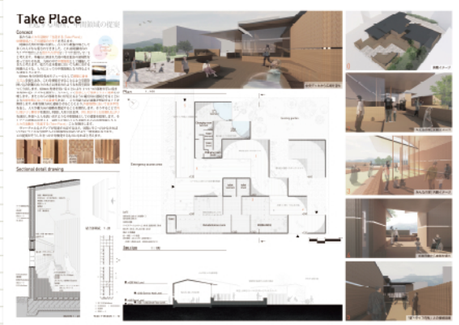
九州大学D（九州大学）

優秀賞 海外部門　"Growing House" 成長する家

ガジャ・マダ大学（インドネシア）

優秀賞 国内部門　Take Place ―生起する場所、中間領域の提案―

副田・時・村上（佐賀大学）



審査員特別賞

海外部門

「Walk the Line, Talk the Line」　チュラーロンコーン大学（タイ）

「Komorebi Bark House」　国立交通大学（台湾）

「A tadpole」　同済大学（中国）

国内部門

「3つの屋根のみんなの家」　松尾（熊本大学）

「かぎかっこの家」　九州大学E（九州大学）

「足湯でつながる『みんなの家』」　福嶋（佐賀大学）

パネルディスカッション

パネルディスカッションは、コーディネーターの曽我部氏の進行でスタート。さまざまな角度から地域に開かれたKAPのこれからの可能性について議論した。「地域の意欲を開くにはどうすればいいのか。」「今回のシンポジウムを通して明日からどんな建築家目指していくのか。」など密度の濃い議論となった。

パネリスト

熊本市現代美術館　主任学芸員
坂本 顕子

高齢者が元気に暮らせることはとても大切なことです。建築というものはそれを設計する人がいて、それをつくり、使う人がいます。シンポジウムを通して、アートよりももっと多くの人が関わってつくられていることを感じました。ごく当たりまえのことですが、その場所がどういう背景をもっているか、どういう文化をもっている人が使っていくのかを知ることは大切なことのように感じます。
わたしのようなジャンル違いでも参加でき、国際的に開かれているのがKAPの多様性の証のように感じました。建築はつくってからが長いことを実感しました。そういうときにアートを活用いただければと思います。

モナシュ大学（オーストラリア）
建築学部副学部長
ARI SELIGMANN（アリ・セリグマン）

KAPは国内のみならず、国際的にも認められるほど、地域に幅広い効果を生んでいます。プロジェクトによって効果の大きさは違いますが、全てのプロジェクトが各地域で、経済活動や文化活動といった様々な面で地域の活性化につながっています。皆さんにも、どんなに小さくとも、文化的・経済的に影響を与えるような建築を造ることを、明日からは考えてほしい。

ガジャ・マダ大学（インドネシア）
IKAPUTRA（イカプトラ）

コンペに参加する際、私達は、阿蘇の文化的な背景を意識しました。実際に阿蘇と似たような活発な火山の近くに住んでいます。今回コンペティションのテーマである「みんなの家」というだけでは不十分で、それに「みんなの生活」というコンセプトを思い描いて設計しました。特にそこに暮らす高齢者の方の存在、生活を考えています。
「ハピネス－幸せ－」というものが、建築物を設計する上で大事な観点です。全ての人にとっての幸せ。家族やコミュニティへの関係性へとつながっていきます。現在は介護施設にいる高齢者の方達がこれまでされてきたこと、今何をしようとしているのかをしっかり考えることが重要です。それが幸せとは何かと考えることにつながると思います。

延世大学（韓国）
MOONGYU CHOI（ムンギュー・チョイ）

今回のような小さなプロジェクトも重要だと思います。日本でこのような審査に参加でき、学生も私も勉強になりました。建造物の役割は、自分は素晴らしい建物を建てた、というのではなく、誰かを幸せにすることです。明日から実践していきたいと感じました。さまざまな考え方を皆さんと共有できたことも幸せだと思います。

くまもとアートポリスアドバイザー
桂 英昭

たくさんの人のアイデアをもらったので、それを自分の建築に活かしたい。学生の皆さんの提案を審査していて、建築家としての原点にかえるための何かを発見できる手がかりがあったように感じました。

くまもとアートポリスアドバイザー
末廣 香織

「みんなの家」に関わるようになって建築をすることに人間は本能的に喜びを感じるものなんだと感じました。それは国際的にも同じようなものなんだと思いました。みんなで喜びを肌で感じることのできるもの、場を造れる建築家になりたいです。

コーディネーター

くまもとアートポリスアドバイザー
曽我部 昌史

我々は地域の文化や伝統に再注目して、新たな可能性を開こうと社会に向き合いつつあります。KAPは地域の意欲を開く方向に向かいつつあると実感しています。ここに集まった国内外の皆さんの多くは稲作文化の国ですから、温かいご飯を作るような建築家となっていきたいという気持ちは共通しているのかもしれません。

プロジェクト見学ツアー

国内外の学生ら総勢７７名が参加し、県南を中心に７つのプロジェクト施設を見学した。高田あけぼの保育園、消防本部庁舎、市立博物館では、当時設計や工事監理に携わられた曽我部昌史氏（みかんぐみ）に説明していただいた。

八代広域行政事務組合消防本部庁舎での集合写真
（制服姿の消防士に海外の学生たちは興味津々）

八代市立高田あけぼの保育園
保護者や地域の方々と話し合いを重ねたこと、こどものスケッチから作った遊具があることなど関係者ならではの話があった。

八代広域行政事務組合消防本部庁舎

八代市立博物館・未来の森ミュージアム

宇土市立宇土小学校

熊本駅周辺整備（熊本駅白川口（東口）駅前広場、熊本駅新幹線口（西口）駅前広場、熊本南警察署熊本駅交番）

交流会「アジアとつながる」

コンペ応募者等が参加した交流会では、昼間の緊張から解放された学生たちが、賑やかな雰囲気の中で、海外の学生たちが持ち寄った、各国ならではのお土産等を囲みながら、お互いの作品や大学生活などについて語り合った。言葉の壁をほとんど感じることなく、参加者全員が深い絆で結ばれ、「アジアとつながる」瞬間を感じることのできた交流会となった。

シンポジウム参加者の声

●九州大学学生
日本人は表現だったり、コンセプトを先に考える。外国の人は観点・視点が違う。アプローチの仕方だったり、技術面を見せたり。コンペでもモックアップを実際に組んでリアルに見せていた。勉強になり、刺激になった。

●延世大学 JIEUN KIM さん
ＫＡＰのことは知らなかったが、今回参加することで、勉強できた。建物だけでなくそこで暮らす人を大事にしていることに感動した。今回は建築を学ぶ学生として、すごくよいチャンスだと思い参加した。

●国立交通大学 Andy WENさん・Yi-Jun Jiangさん
日本に来て感じたのは、日本人の勤勉さ。今回のように各国から学生が集まってこのような場があるのはいいこと。自分自身の刺激になった。